新刊のお知らせ　2023年10月下旬発売予定　日本聖書協会

"黙想シリーズ" 最新刊

主の言葉と過ごす、ひと時を。

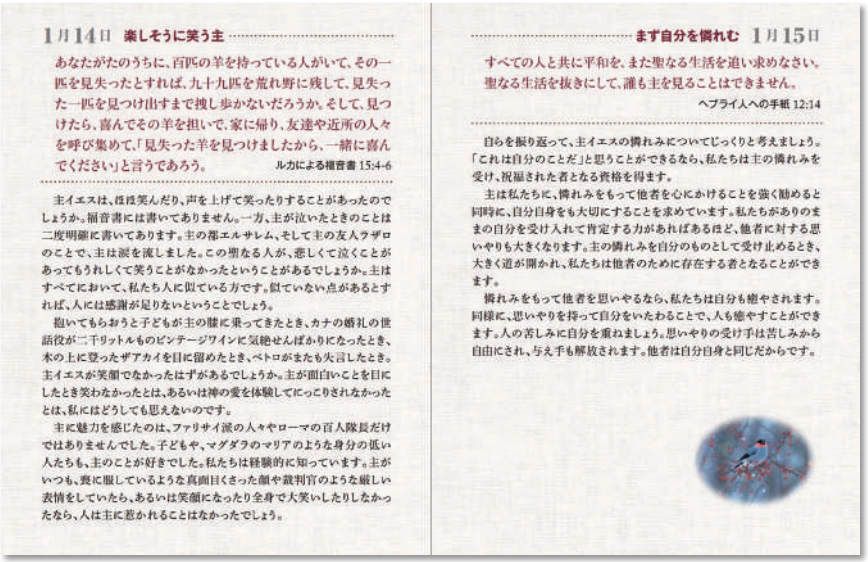
聖書 聖書協会共同訳

ひと時の黙想　心の貧しい人とは

絵：ブレナン・マニング　写真：山崎雅郎　文：日本聖書協会

心貧しい者に注がれる神の愛を知る一年。

アルコール依存症を患う自分の弱さや失敗を、隠すことなく語ったことで知られたマニング。本書が初の邦訳です。神の前にある自分の貧しさを知り、ただ主に憐れみを乞う人に注がれる、神の大きく激しい愛を語ります。



1月14日　楽しそうに笑う主

あなたがたのうちに、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を荒れ野に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し歩かないだろうか。そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、「見失った羊を見つけましたから、一緒に喜んでください」と言うであろう。　ルカによる福音書 15:4-6

主イエスは、微笑んだり、声を上げて笑ったりすることがあったのでしょうか。福音書には書いてありません。一方、主が泣いたときのことは二度明確に書いてあります。主の都エルサレム、そして主の友人ラザロのことで、主は涙を流しました。この聖なる人が、悲しくて泣くことがあってもうれしくて笑うことがなかったということがあるでしょうか。主はすべてにおいて、私たち人に似ている方です。似ていない点があるとすれば、人には感謝が足りないということでしょう。

抱いてもらおうと子どもが主の膝に乗ってきたとき、カナの婚礼の世話役が二千リットルものビンテージワインに気絶せんばかりになったとき、木の上に登ったザアカイを目に留めたとき、ペトロがまたも失言したとき。主イエスが笑顔でなかったはずがあるでしょうか。主が面白いことを目にしたとき笑わなかったとは、あるいは神の愛を体験してにっこりされなかったとは、私にはどうしても思えないのです。

主に魅力を感じたのは、ファリサイ派の人々やローマの百人隊長だけではありませんでした。子どもや、マグダラのマリアのような身分の低い人たちも、主のことが好きでした。私たちは経験的に知っています。主がいつも、喪に服しているような真面目くさった顔や裁判官のような厳しい表情をしていたら、あるいは笑顔になったり全身で大笑いしたりしなかったなら、人は主に惹かれることはなかったでしょう。

まず自分を憐れむ　1月15日

すべての人と共に平和を、また聖なる生活を追い求めなさい。聖なる生活を抜きにして、誰も主を見ることはできません。
ヘブライ人への手紙 12:14

自らを振り返って、主イエスの憐れみについてじっくりと考えましょう。「これは自分のことだ」と思うことができるなら、私たちは主の憐れみを受け、祝福された者となる資格を得ます。

主は私たちに、憐れみをもって他者を心にかけることを強く勧めると同時に、自分自身をも大切にすることを求めています。私たちがありのままの自分を受け入れて肯定する力があればあるほど、他者に対する思いやりも大きくなります。主の憐れみを自分のものとして受け止めるとき、大きく道が開かれ、私たちは他者のために存在する者となることができます。

憐れみをもって他者を思いやるなら、私たちは自分も癒やされます。同様に、思いやりを持って自分をいたわることで、人も癒やすことができます。人の苦しみに自分を重ねましょう。思いやりの受け手は苦しみから自由にされ、与え手も解放されます。他者は自分自身と同じだからです。

※デザイン等が変更される場合があります。ご了承ください。

合成皮革装・スリーブケース入り

判型：天地135×左右103㎜　頁数：416頁

定価2,200円（本体2,000円＋税10%）

ISBN 978-4-8202-9286-9